特集

地域資源の発掘と情報共有システムの構築をめざして
—民学官による連携・協働の仕組みづくりの試み—

後藤　範章
GOTO, Noriaki
（日本大学文理学部教授）

はじめに

2009年2月発刊の本誌創刊号を飾った特集「都市社会における自治と協働」には、大変示唆深く読み応えのある充実した論文が並んだ。

寄本勝美（早稲田大学）「役割相乗型の社会システムを求めて—市民・企業・行政のパートナーシップ—」では、「市民と企業と行政のそれぞれの役割を適切に組み合わせ、それによって得られる相乗的な効果をできるだけ大きくしていくことができる仕組み」としての「役割相乗型社会システム」を実現するための条件が検討された。

大杉覚（首都大学東京）「大都市における都市内分権と地域機関—特別区における総合支所制度と自治・協働の推進—」では、世田谷区の「都市内分権（都市社会内に設けられた一定の単位への権限付与）」の取り組みを「『地域発自治創造』の地平を切り拓く最前線の自治体パブリック・ビジネス・モデル」として位置づけ、考察が加えられた。

渡戸一郎（明星大学）「自治体の協働政策と『市民協働』の課題—東京都区部の事例を中心に—」では、市民活動団体と行政との「協働」を、「予定調和的な協力関係ではなく、むしろ対抗的相補性とも言える緊張感を孕んだ関係性」のもとに捉え直し、「地域における新しい『弱い専門システム』の構築と支援」が構想された。

望月照彦（多摩大学）「地域から世直しを考える（世田谷型地域経営論）—サザエさんスタイル、身の丈コミュニティ・マネジメントのすすめ—」では、世田谷区の有する「エッジシティ（周縁都市）としての内在力」に着目し、「世田谷商人塾」で培われた経験やノウハウをもとに「地域から世界の健全さを作り上げていく手だて」が展望された。

原昭夫（自治体まちづくり研究所）「世田谷区における市民の参画と協働のまちづくりの課題と方向」では、世田谷区が取り組んできた「参画と協働のまちづくり（市民と自治体との協働・連携・切磋琢磨によって進められるまちづくり）」の30余年の経緯を詳細に振り返り、乗り越えるべき具体的な諸課題が提示された。

いずれも、「せたがや自治政策研究所」が掲げる「地域の構成員である区民、事業者、区との協働の推進と区民主体のまちづくりの発展に寄与する」という「目指すべき方向」を具現化する内容であり、自治体シンクタンク並びに機関誌の独自の存在理由（レゾン・デートル）を示す特集であったと言える。

本稿は、この成果を引き継ぎ、各論文で示された課題を踏まえ、「諸主体間の協働にも

とづくまちづくり」のあり方について探究をさらに深めることを企図している。

1．「参画と協働のまちづくり」の課題

上掲の原論文では、以下のような生々しい疑問や批判の声が紹介されていていた。一部を引用しておこう。

「参加」の機会として行われる説明会やワークショップには、関心や反対の意見を持つ人、時間のある人しか出席してこない。それでは「地域の意見を代表する」ことにはならず、片寄った意見に陥ることになる。／「まちづくり協議会」なども決まった人しか出席せず、固定化・高齢化しているのが現状。新規参加者が入りにくく、足は遠のいてしまう。／「とにかく住民に知らせた」「投げかけた」というアリバイづくりのようなものも多い。／「参加」に対して情熱や経験に乏しい担当者も多く、説明や資料も難解で、地域の問題を熱気を込めて論ずる場にならない。

これらは、「住民参加」や「協働」が掛け声倒れに終りがちな一面を突いており、同時にまた、「役割相乗型社会システム」（寄本）や「弱い専門システム（専門家が当事者と人格的に係わり、当事者の持つ潜在的な力を引き出し、当事者同士が協力しつつ問題を解決しようとするのを支援するシステム）」（渡戸）を構築することの困難性、「身の丈コミュニティ・マネジメント」（望月）を実践することの困難性をも指し示している。

「参画と協働のまちづくり」の実効性を高めるには、大杉論文が主張する「地域発自治創造の過程」にコミットする「公務員市民」としての自覚と意思を体現する行政職員の育成、あるいは渡戸論文が言及する「コミュニティの外に向けてネットワーキング役を果たすと同時に、地縁的組織の内に向けてプロデューサー役を果たせる『課題解決型マネージャー』」の育成、望月論文が紹介する「世田谷商人塾」で試みられているような「マチヅクリスト（まちづくりのリーダー）」たり得る人材の育成も、共に欠かすことの出来ない要素となるであろう。「まちづくりとは、人づくりである」と言われる所以である。しかし、これとても、原の言う「普遍性・全体性」を獲得するのは容易ではない。

住民、企業などの事業体、大学などの教育・研究機関、地方公共団体などの行政機関といった地域で生活／活動する異質多様な諸主体が、足下のまちに興味・関心を抱き、様々な課題や問題点の解決を志向してより良いまちに作りかえていく、「普遍性・全体性」を有する諸活動に幅広く関わっていくためには、実現可能性の高い何らかの「仕組み／仕掛け」を用意して「まちづくり」に埋め込んでいく作業が別途必要になるはずである。

本稿で紹介し検討する事例／取り組みはそのための試みの一つであり、京王線の下高井戸駅・桜上水駅周辺地区における活動の現場や関係者にフィードバックすることで、現在進行中の「連携・協働のまちづくり」活動のより一層の展開を図ろうとするものでもある。

2．京王線沿線のまちづくり—経緯と現況—

現在、京王電鉄京王線沿線の下高井戸駅及び桜上水駅周辺地域において、民学官の連携・協働の仕組みづくり／仕掛けづくりが模索されている。

京王線の笹塚駅（東京都渋谷区）～仙川駅（同調布市）間の線路と道路とを連続して立体交差化する事業に関しては、既に 1969 年 5 月に都市計画決定され、一部（1970 年に杉並区にある八幡山駅、1978 年に笹塚駅）で高架化が実現しているものの、事業は遅々として進まなかった。近年、大都市圏内各地で「開かずの踏切」解消を主目的として連続立体交差事業が活発になり、京王電鉄関連でも 1993 年に京王線長沼駅・北野駅付近（東京都八王子市）と京王線府中駅付近（同府中市）が高架化によって、また 2012 年完成予定の京王線柴崎駅～西調布駅間及び相模原線調布駅～京王多摩川駅間（いずれも東京都調布市）が地下化によって、鉄道と道路との連続立体交差を実現した／しつつある。

こうした動向とも関連して、京王線笹塚駅～仙川駅間の連続立体交差化と開かずの踏切解消の実現を求める様々な活動が、とりわけ沿線自治体と地域住民が連携して強力に推し進められ、成果が徐々に現れるようになっている。

2002 年 1 月、世田谷区内に「京王線連続立体交差化研究会」が設置され、2003 年 2 月には京王線沿線の 15 商店会により「京王線立体化推進協議会」が発足。2003 年 3 月には、東京都、世田谷区、杉並区、京王電鉄株式会社の四者によって「京王電鉄京王線（笹塚駅～仙川駅間）の道路・鉄道の立体化及び沿線の街づくりに関する検討会」が立ち上げられ、2004 年 6 月には、東京都が京王線等を鉄道立体化の検討対象区間に位置づける「踏切対策基本方針」を示し、翌 7 月には世田谷区で「開かずの踏切解消促進協議会」が設立された（世田谷区長が協議会会長を務め、以降、「開かずの踏切解消促進大会」が 2009 年度までに 5 回開催されている）。2007 年には、東京都が京王線代田橋駅～八幡山駅付近と西武新宿線中井駅～野方駅付近の 2 区間を連続立体交差事業の新規着工準備箇所として採択するように国土交通省に要望し、翌 2008 年 5 月に採択された。こうした中、世田谷・杉並両区は共に、京王線沿線の連続立体交差事業を各地区の街づくり事業に連動させることによって、都市計画のマスタープランに示された都市基盤整備を推進していこうとする基本姿勢を鮮明にした（世田谷区 2006, 2009; 杉並区都市整備部 2009）。行政による強力な方向付けと支援体制のもとに、沿線各駅の周辺地区に「街づくり協議会」が相前後して設立され、「民官連携・協働による街づくり」活動が膨大な時間とエネルギーを費やしながら着実に積み重ねられていく。

本稿で事例として取り上げる下高井戸駅と桜上水駅（筆者が所属する日本大学文理学部の最寄り駅）の周辺地区においても、以下のような展開が図られている。

2005 年 9 月、下高井戸商店街振興組合の有志が中心となって「下高井戸駅周辺地区街づくり協議会設立準備会」が結成され、翌 2006 年 10 月、これを土台に「下高井戸駅周辺地区街づくり協議会」が 69 名の会員によって正式に発足し（2008 年 8 月現在の会員数は、世田谷区民 89 名＋杉並区民 16 名＝105 名となっている）、同年 11 月にはホームページを

開設している。現在「地区街づくり計画原案」を検討している最中であり、2010年3月頃までに原案（素案）をまとめ、同年5月の総会での承認を経て、同年6月以降に世田谷・杉並両区長宛に提案することになっており、重大な局面を迎えつつある。

他方、桜上水駅周辺地区では、開かずの踏切による交通渋滞や地域分断の解決をめざして2005年2月に結成された「桜上水駅とその周辺を考える会」を発展的に解散させて、2007年8月に「桜上水駅周辺地区街づくり協議会設立準備委員会」が結成され、翌2008年6月、178名（世田谷区民154名・杉並区民24名）の会員によって「桜上水駅周辺地区街づくり協議会」が正式に発足、2009年6月にはホームページを開設している。

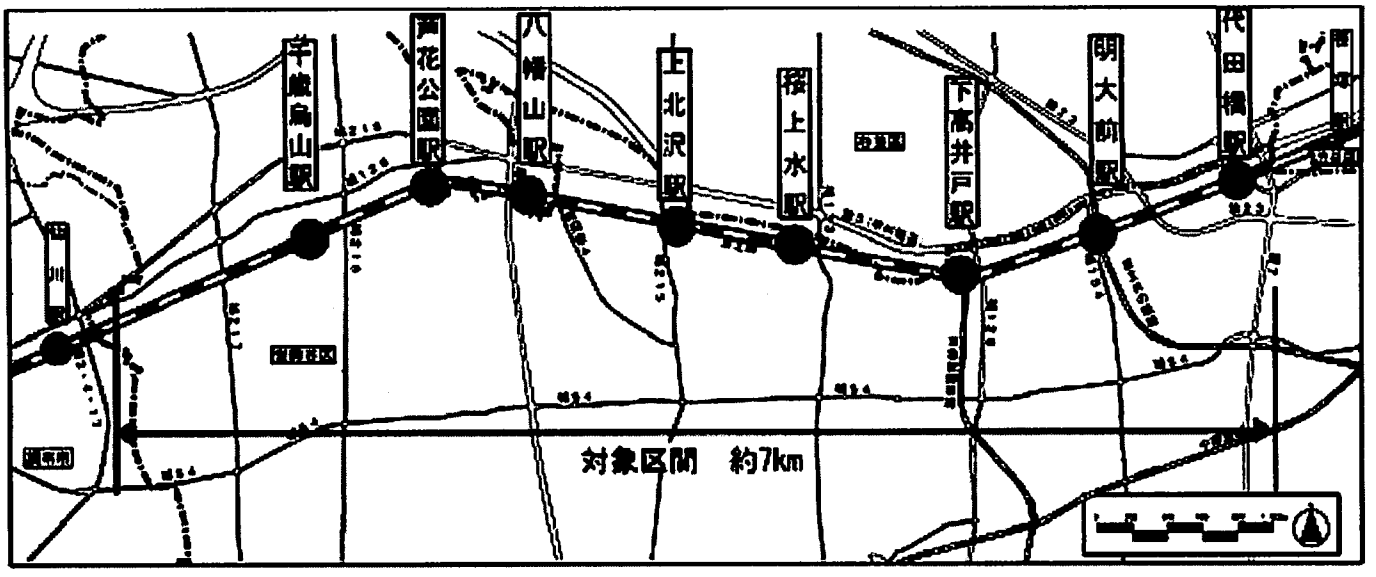
両協議会[1]共に、1月に1回の運営委員会や1年に2回程度の総会の他に、ワークショップ、見学会、まち歩き、部会やチーム毎の検討会・勉強会などを頻繁に開催し、地区の将来構想について精力的に検討を重ねている。筆者も、2007年11月以降、「下高井戸駅周辺地区街づくり協議会」の運営委員会や見学会・懇親会などにオブザーバーとして参加するようになり、「桜上水駅周辺地区街づくり協議会」とも後述するような関わりを持つようになっている。行政職員（世田谷区交通政策担当部鉄道立体・街づくり調整担当課、杉並区都市整備部まちづくり推進課の担当者）やコンサルタント（都市計画・土木工学・建築等の専門家）と対等に渡り合う協議会メンバー（地元住民）の力量の高さや想い・志の強さに、いつも目を見張っている。

とは言え、連続立体交差化が実現するまでにはまだ10年以上の年月を要する見込みであり、実際の「街づくり」もまだ何も始まってはいない。しかしながら、ここへ来て、にわかに現実味を帯び、地域住民の関心も高まっている。と言うのも、2009年11月11日(水)～20日(金)に東京都・世田谷区・杉並区・京王電鉄株式会社の四者が住民向けの説明会を8会場で8回に渡って開催し、京王線の連続立体交差化・複々線化および関連側道計画に関する「都市計画素案」（1969年の都市計画決定の変更を伴う）を提示したからである（東京都ほか 2009）。その主たる内容は、笹塚駅～仙川駅間の約7.1kmを高架化し（これによって7つの都市計画道路が立体交差化し、25箇所の踏切が除去され、踏切での慢性的な交通渋滞が解消される）、笹塚駅～つつじヶ丘駅（東京都調布市）間の約8.3kmを複々線化する。さらに、住宅地の環境保全や駅へのアクセスの向上、安全性と防災性の向上を目的として、側道（鉄道付属街路）や駅前広場等の整備も併せて行う。これらの計画の実施によって、鉄道で分断されていた地域が一体化して「安全で快適なまちづくりが推進」される、というものである。

タイムスケジュールに関しては、2012年までに都市計画決定し、2013年に都市計画事業の認可を受けて2022年までに連続立体交差化の事業を完了させ、その後で地下方式による複々線化の事業着手をめざすとしている（複々線化の竣工予定は示さず）。

連続立体交差化の対象区間は、資料1の通りである。区間中にある25箇所の踏切の全てが、「ピーク時1時間の遮断時間が40分以上」の「ボトルネック踏切」となっている。

資料１　京王電鉄京王線の連続立体交差事業の対象区間（笹塚駅～仙川駅）



出所：『京王線沿線街づくり基本方針』世田谷区、2009 年 5 月、2 頁

高架化を基本として連続立体交差化を果たそうとする計画案に対して、オルターナティブ（全面地下化）の実現をめざす住民の動きも起こっている。また、世田谷区が同時に発表した「京王線沿線駅前広場基本構想」には、「将来構想としての各駅の駅前広場やアクセス道路についての区の考え方」が提示され、構想図も公表されている。パンフレットには「区の考え方を示したものです。したがってこの構想によって位置が確定したものではありません」と断っているように（世田谷区交通政策担当部 2009）、計画決定までには紆余曲折が予想される。おそらく、各駅周辺地区の街づくり計画が決定するまでに 5 年程度、地区街づくり事業が本格的に動き出すまでに 10 年程度は間違いなくかかると見ておくのが妥当な線と思われる。

３．ハードな街づくりの落とし穴

「街づくり」の基本は、「都市計画法」にもとづいて施行される「市街地開発事業」に置かれ、具体的には「土地区画整理法による土地区画整理事業」「新住宅市街地開発法による新住宅市街地開発事業」「都市再開発法による市街地再開発」「新都市基盤整備法による新都市基盤整備事業」「密集市街地整備法による防災街区整備事業」等々を主たる内容とする。

今回の「京王線沿線街づくり」も市街地開発事業が土台に据えられており、行政が事業者となって、地域住民との連携・協働を基軸に、都市計画法その他の法律に則って各駅周辺の既成市街地を改造／再開発すること（＝ハードな“街”づくり）が最優先課題と位置づけられている。

このことは、例えば、世田谷区（2009）で示している以下のような「沿線街づくりの課

題と目標」からも看て取ることができる。

沿線地域の課題

○ 区民の日常生活を支える駅周辺地区の魅力向上

○ 交通手段相互の乗り換え利便性の向上や移動の円滑化

○ 災害時の対策を強化し、防災機能の向上

○ 交通の安全性や円滑性の向上

○ 沿線南北方向の地域交流の活性化

沿線地域の街づくりの目標

○生活拠点の整備

・ まちの中心となっている駅周辺の街並み、魅力づくり

・ 商業・サービス機能の集積による充実・活性化

・ 地域の個性を活かした生活拠点づくり

・ 安全で快適に住み続けられる住環境の維持保全、防災性の向上

・ ユニバーサルデザインの街づくり

○沿線市街地の一体化

・ 鉄道立体化による地域分断の解消および沿線市街地の一体化

・ みどりのネットワーク形成等による環境にやさしい街づくり

・ 鉄道立体化後の高架下・上部空間等の有効利用

・ 地域住民や学校、NPO 等の多様な主体による協働の街づくり

○交通結節機能の強化

・ 各駅の特性に応じた駅前広場の整備

・ 駅前広場や駅アクセス道路等の整備推進

・ バス交通等の導入による交通結節機能の強化

・ ユニバーサルデザインの街づくり

○道路ネットワークの形成

・ 公共交通不便地域の解消

・ 都市計画道路や主要生活道路等の整備

・ 安全で快適に通行できる地域交通ネットワークの整備

・ 歩行者や自転車のネットワークの形成

各駅周辺地区の街づくり計画に関しては、こうした方針にもとづいて街づくり協議会等で協議と検討を重ねて具体化する方向性が打ち出されているが、これも「京王線沿線街づくり基本方針」に色濃く反映している都市計画・建築・工学系の「ハードな街づくり」の発想と手法がベースになる可能性が高い。

このこと自体を否定するつもりは毛頭ないのだが、ハードな街づくり一辺倒になると、往々にして駅前に広場や商業ビルをこしらえただけで終わってしまい、結果的にまちの持

つ個性や魅力が削がれて沿線の各駅周辺が「金太郎飴」になりかねない。

作家・演出家の鴻上尚史氏が、「東京新聞」に「わが街 わが友」を 9 回にわたって連載した最終回で「下高井戸」（鴻上氏の現在の居住地）を取り上げ、下高井戸の駅前に「理想とする駅前の風景」が広がっているとして、次のように語っていることが興味深い（2009 年 12 月 25 日付朝刊）。「駅前は秩序だたない方がいい。いろんな人がいろんな場所でいろんな物を売っていて、いろんな人やいろんな物といろんな出会い方をする場所が、駅前だと僕は思っている」。「これが、すっきりと区画整理され、清潔でコンパクトなビルが建ってしまうと、魅力は一気になくなってしまう」、と。

駅前の商店街がユニークで、元気があって、面白く、味わいがあって、散歩と買い物、飲食やおしゃべりや暇つぶしなどが同時にできてしまえるほど奥行きがあって、楽しくて、くつろげるまちであれば、道行く人々の回遊性が高まり滞留時間も多くなり、結果的にまちはますます活性化する。様々な出会いと交流が育まれ、人が育っていくまちであれば、商店街の周りの住宅地も、安全で安心して暮らせる、子どもを生み育てるに相応しい環境が出来上がっていく。下高井戸駅周辺地区も桜上水駅周辺地区も、そうした「正のスパイラル」が作動する潜在的な可能性と魅力を持ち合わせている。

世田谷区も、「人が主役で地域の個性を活かしコミュニケーションを育む街づくりを進める」ことを標榜して、「人（区民主体の街づくり）」・「地域（沿線地域一体の街づくり）」・「絆（人と地域、過去と未来をつなぐ街づくり）」をキーワードに掲げ、杉並区共々、地域住民との対話を真摯に重ねながら、街づくり協議会の議論と検討の行方を見守り、時間とエネルギーを注いで各駅周辺地区の特性を最大限に生かした計画を立てようとする姿勢を前面に打ち出している。街づくり協議会に集結している地域住民も多種多様で、立場や意見には幅があるし、利害や思惑が交錯することもあり、結論がすんなりと出る状況にはないのだろうが、これまた時間とエネルギーを注いで粘り強く議論と検討を重ねている。そうした現場の内情を肌身を通して多少は知っているだけに、現在進行中の民官連携・協働のまちづくりを「社会実験」と位置づけ、様々な取り組みを積極果敢に積み重ねて、他のモデルとなるような成果が上がることを期待してやまない。

そこで、「ハードな“街”づくり」が陥りやすい欠点を回避するには、1)人づくり（エンパワーメント）／コトづくり／関係づくり／仕組みづくり／仕掛けづくりといった「ソフトなまちづくり活動」を「ハードな街づくり事業」に先だってたっぷり積み重ね成果を上げること、2)なかなか表に出てこない「顔の見えない人々の声」を合意形成のプロセスに取り込むこと、3)渡戸の言う「対抗的相補性とも言える緊張感を孕んだ関係性」も育んで「共通の土俵」を最大限に押し広げること、4)これらを相互に有機的につなぎ合わせ「せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム」を作動させて相乗効果（シナジー）を高めること、が鍵を握るように思う。

以下、本稿で取り上げる事例は、このうちの 1)と 2)と 4)に関連するものである。

4．民学官の連携・協働の仕組みづくりの試み

2007年11月に「下高井戸駅周辺地区街づくり協議会」と関わりを持つようになって以降、日本大学文理学部「地域連携推進委員会」委員長（水嶋一雄地理学科教授）に働きかけて一緒に協議会の会合に参加したこともあった。関係性が徐々に整ってきた2008年7月、協議会と世田谷・杉並両区と日本大学文理学部との間で何らかの連携・協働ができないだろうかとの打診を非公式に受けた。「物語」はここから始まる。

とは言え、学部側の対応は遅く、協議の場を持つことさえままならなかった。私の方でも、「質的分析法」や「社会学演習」といった学部の授業で、「世田谷再発見」をテーマとするフィールドワーク実習を学生に課したり、「下高井戸プロモーションビデオ」を制作したりと、地元をフィールドとした教育実践を重ねていたが、協議会にも出たり出られなかったりで一貫して関わり続けることができず、しばらく足踏み状態が続いた。

それが、2009年4月になって、両区と文理学部による協議の場が初めて設けられたのを機に、ようやく動き出すこととなった。その後、会議や懇親会やメールのやり取りを何度となく重ねた結果、下高井戸駅周辺地区街づくり協議会と世田谷・杉並両区と文理学部の三者で「まちづくり連絡会」を設け、学術的な調査研究の実施やシンポジウムの開催などについて検討していくと共に、桜上水駅周辺地区街づくり協議会と文理学部社会学科後藤ゼミとがジョイントして、双方が交互に主催してまち歩きとワークショップをそれぞれのやり方で行ってみることにもなった。

こうした中で、桜上水駅周辺地区街づくり協議会が主催する「第2回まち歩き」が2009年11月8日(日)に行われた。協議会メンバー17名、コンサルタント1名、世田谷・杉並両区の職員3名、文理学部側11名（水嶋・後藤・松橋達矢社会学科助教・大学院生1名・後藤ゼミの学生7名）の合計32名が3チームに分かれて地図を片手にまちを歩き、区立松沢小学校のミーティングルームで報告し意見交換を行った。まちを歩いて点検し、桜上水駅周辺地区の長所・短所・課題を記入した「まち歩きMAP」が作成された。

2009年12月13日(日)、今度は私のゼミが主催して、「“桜上水 新／再発見！”プロジェクト―地域資源（ひと・こと・もの）の発掘と情報共有システムの構築をめざして―」と題するプロジェクトの一環として、「第1回ワークショップ」が行われた。協議会メンバー12名、世田谷・杉並両区の職員2名、後藤ゼミの学生8名、大学院生1名、松橋・後藤の合計25名が4チームに分かれて「GPSユニット」を携行してまちを歩き、写真を撮影して持ち帰り、学部の教室で画像データを処理し、スライド上映しながらプレゼンと意見交換を行った。ワークショップは、地域に眠っている“宝もの(資源)”／まだ十分に知られていない桜上水の素晴らしさを、後藤ゼミが16年間に渡る“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクトで開発・実践している“集合的写真観察法”というフィールドワークの手法を応用して掘り起こし（＝新／再発見し）、新たな意味や価値を見いだし、そうした情報を地域で共有化すると共に、それらをつなぎ合わせて新たな「魅力」を創出するこ

とを通して、桜上水駅周辺地区をちょっと違った視点でプロデュースしてみることをめざしたものである。

本稿で扱う「民学官の連携・協働の仕組みづくり」の試みの事例は、このワークショップに端を発するものである。そこでまず、この背景となっているゼミのプロジェクトと調査研究の方法に関してやや詳しく説明しておこう[2)]。

5．「見る」社会調査

私のゼミで実践している“集合的写真観察法”は、ビジュアル調査法（後藤 2010）の一種である。

ビジュアル調査法は、ビジュアル素材（マテリアル）（写真・ビデオ・映画・TV番組・絵画・彫刻・ポスター・イラスト・スケッチ・マンガ・絵はがき・建築物・景観などをもとにした「ビジュアル・イメージ」）を収集し整理・加工・保存・管理（データ化）し分析・解釈して、意味世界を探求し新たな知見を提示する調査法である。調査研究のプロセスで、①カメラやビデオカメラといったビジュアルなツールを用いてビジュアル素材を収集する（＝研究手段としてのビジュアル・メディア）、②ビジュアル素材を整理・加工・保存・管理して研究のデータとする（＝研究対象としてのビジュアル・データ）、③ビジュアル・データを「見ること」に軸足を置いて分析し解釈する（＝視覚に基礎を置いたデータ解釈）、④調査研究の成果をビジュアルに表現する（＝ビジュアルなアウトプット）、のいずれかまたは全てが含まれる。データの一形態であれ、更なるデータを生み出す手段であれ、結果を表わす手段であれ、調査プロセスに不可欠なパートとしてビジュアル素材が生成ないし活用される「見る」社会調査と言って良い。

ビジュアル調査法、ビジュアル素材の活用や読み解きを含む広い意味でのビジュアル・メソッドは、従来の社会調査ないし社会学の研究では軽視されてきた。

ハワード・ベッカーは、天文学・生物学・核物理学などに代表されるように、自然科学はビジュアル・メソッドを不可分なものとして発展してきたのに対して、「これらの可能性を無視し、これらのリソースの良い使用に失敗したのは社会科学だけなのだ」(H. Becker 2004: 197)、と断罪している。ジェフ・ペインとジュディ・ペインは、「ほとんどの社会学者は『ヴィジュアル的能力が無い』のである。なぜなら、ヴィジュアル・イメージの利用を考慮する痕跡がほとんどないからである」(Payne, G. & Payne, J. 2004＝2008: 265)、と酷評している。

他方で、見るべき成果も現れるようになっている。近年、ビジュアル・メソッドやビジュアル社会学に対する関心が高まりをみせ、調査研究の成果も一定程度積み重ねられるようになっている。私のゼミで取り組んでいるプロジェクトもその一つであり、社会調査、とりわけ質的調査において、「視聴覚的再編成」をめざした新たな動きが、いま、着実に歩を進めつつある[3)]。

6．“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクトと集合的写真観察法

私は、“写真で語る：「東京」の社会学”と題する調査研究プロジェクトを、ゼミの学生と共に1994年度より継続している（後藤範章 1996, 2000, 2005a, 2005b, 2009a；大谷信介・木下英二・後藤範章・小松洋・永野武 2005：277-279ほか）。写真の中の「細部に宿る神」「細部に現れる啓示」をくみ取って「社会学すること」に取り組むために編み出した方法が、「集合的写真観察法」である。「社会学すること」とは、見えにくい社会のプロセスや構造（不可視性）を社会層（階級・階層・年齢・世代・ジェンダー・エスニシティ、家族・親族・地域・職域、関係・集団・組織など）や因果の関係と絡ませて究明し、可視化・可知化していく「社会的世界の探求」活動が含意されている。

研究の素材とするのは学生が撮影した「東京写真」であり、それらは「東京と東京人に関する多元的で重層的なリアリティが刻み込まれた質的データ群」を構成する。調査は、これらの写真“を”「社会学の眼」で見直す、写真“で”まちや人々を社会学的に見る（＝読む）ことから出発する。

写真は、このような見方／読み方を最大限に保証するメディアである。それは「無意識が織りこまれた空間」であり、人々は「既知の諸要素を目に見えるようにするだけでなく」、そこから「未知の要素」をも「発見する」（Benjamin, W. 1935-36＝1995：619）。この意味で、肉眼の意識がとらえきれず、また文化的バイアスのもとで見逃してしまう微細なディテイルをも公平に記録する、「都市の無意識の標本断片」（西村清和 1997：34）なのである。意識的に写し、また無意識的に写りこんでいる様々なディテイルは、様々なテクスト、様々な物語が語られる断片であり、従って1枚の写真は、「物語素の束」（西村 1997：45）と見なし得る。「写真を撮るという操作は、自明な存在としての世界が行う自動筆記」（Baudrillard, J. 1997：47）であり、「カメラの視覚」は写真家の意図や意味が投影される「肉眼の視覚」を覆い尽くす。写真には、写真家の眼にとまらぬ「コードのないメッセージ」（Barthes, R. 1961＝1984：3-4）も写し取られるのであり、この意味で第三者による介入（自由な読解／再解釈）を大きく許容する特性を有している。

となると、問題は「物語素」に応じたテクスト（物語）をどのように構成していくのかに移る。別言すれば、写真から社会学的な視点（アイディア・仮説・概念・命題など）をア・ポステリオリに見出して、いかなる意味世界を構想し探求するかであり、これを実現する手法が「集合的写真観察法」なのである。写真の撮影以上に、他のリサーチ・メソッドを動員しながら、写真を観察し読み込み解釈して「物語る」ことに力点が置かれる。

ゼミの学生たちは、写真をもとに「物語」を構想した上で、写真に写し取られている場面（現場）に立ち降りてフィールドワーク（参与観察、直接観察、聞き取り、アンケートなど）を実施し、関連する文献（先行研究）や史・資料を集め、読み込み分析して、作品のタイトルと400字程度の解説文を練り上げる。かくして、写真＋タイトル＋解説文＝画像

＋テクストのワンセットから成る作品が次々に産出される。グループワークを2ヶ月半ほど費やして仕上げられた作品群は、毎年学内で展示発表すると共にウェブサイト[4]でも公開する。1994年度～2009年度の16年間に発表した作品数は、合計で410点を数える。

「集合的写真観察法」と称するメソッドは、このプロジェクトを積み重ねる中で次第に形が整えられ編み出されていったものであり、以下のような特徴点を有している。

(i) 調査と作品化は、次の3段階を経て進行する。α.写真“を”見る（→感じる）――写真を直接「凝視／観察」し視認性を高めて「感応」することで、写真から「小さな物語素」を抽出する。β.写真“で”見る（→読む）――物語素に対応する「新たにテーマ化した社会事象」を、写真を介して（間接的に）観察し、社会学的想像力を働かせて「写真の背後に隠れているより大きな社会的世界」を読む。γ.写真“で”語る（→調べて物語る）――写真に写っている／写っていない場面・現場に立ち降りフィールドワークを行って実証データを収集・整理・加工・分析し、言葉に置き換えたテクストを写真に「寄生」させて写真と共に語る（＝解釈し物語る）。これらを集団による協働作業として（＝「対話」を重ねて「集合的」に）行うことによって、写真の中に見え隠れしている「社会のプロセスや構造」（不可視性）の可視（視覚）化と可知（知覚）化が図られる。

(ii) 観察（調査）者たちの間で展開するドラマティックな相互作用を積み重ねることで形成される「間主観性」が、作品化に決定的な作用を及ぼす。写真“を／で”見ることを基軸に展開する相互作用を経て、一人一人の認識作用が融合し、「集合的」な解釈枠組みや解釈が織りなされて、像（イメージ）が結ばれ「物語」が成立する（＝集合表象（コレクティブ・イメージ）の結晶化）。当初はややもすればステレオタイプに彩られた一面的で表層的な「東京」認識が、フィールドワークと文章化の作業を継起的かつ集合的に重ねる中で、劇的に一変する。「せめぎ合いと紡ぎ合いのダイナミズム」が作動し、解釈（読み）に「形」を与え「語り」が成立するのである。そして、「せめぎ合い」が「紡ぎ合い」に転ずる臨界点が、観察者たちの社会的リアリティへの「感応力（センス・オブ・ワンダー）」と「社会学的想像力（ソシオロジカル・イマジネーション）」の「質的転換点」となる。

(iii) 方法の信頼性は、フィールドワークにもとづく写真に写る／背後に隠れている「場面（社会的世界）」の再現と「関係者」の主観的意味の理解によって補強される。また、マルチ・メソッドによるデータ収集と分析結果の総合が集団的・集合的な作業として行われることで、信頼性が担保される。

(iv) 解釈の妥当性は、データを多元的・重層的に分析することによって、別個に検証（テスト）される。また、教師（研究者）による「介入」を受けながら形成されるゼミの間主観性（集合性）が、妥当性を担保する。

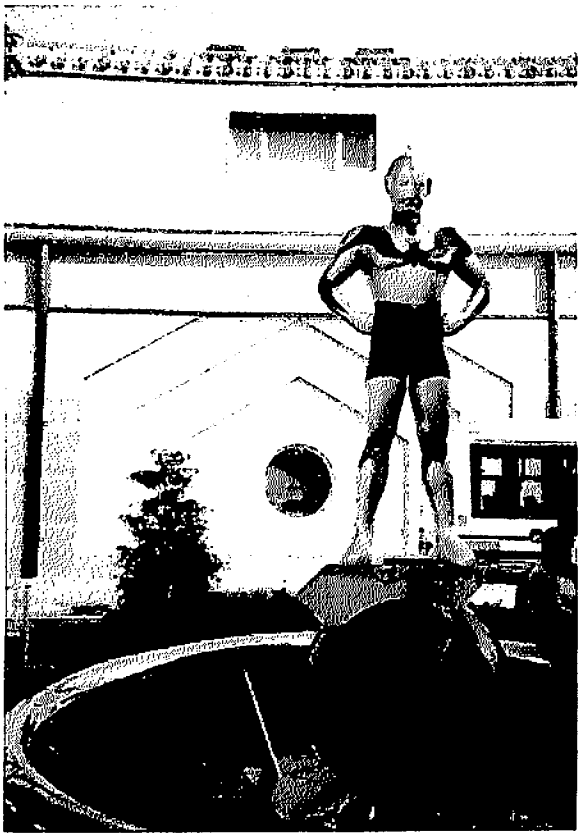
7．まちづくりへの応用可能性

集合的写真観察法は、肉眼では捉えきれない都市の意識や無意識が写り込む写真を素材

に、調査者（写真観察者＝作品制作者）の集合的な視覚経験がベースとなって成立する。それは、「写真“を”見ること」によって感応力を高めて小さな物語素を引き出し、「写真“で”見ること」によって社会学的想像力を働かせ、「写真の背後に隠れているより大

資料2　世田谷区内で撮影した写真を用いた作品の一例

ウルトラマン参上！ —偶像崇拝の下地—（2007年度作品）



小田急線の祖師ヶ谷大蔵駅の駅舎を背景に、高さ約4mのウルトラマン像(2006年3月完成)がそびえ立つ。向こうのバスもリングにまたがる女性も、小さく見える。

1927(S2)年の小田急線開通と同時に開業した祖師ヶ谷大蔵駅の周りには、3方面に延びる3商店街が別々にある。全部を合わせると、約4kmに550店舗が並ぶ都内有数の大商店街。2005年4月に合体して、「ウルトラマン商店街」に生まれ変わった。

1963年、駅の南側に広がる砧地区に、ウルトラマンを生んだ円谷プロが設立され、日大商学部が移転してきた。円谷プロは東宝から独立し、日大の場所は東宝の跡地だった。現在でも、近くには東宝スタジオ(旧砧撮影所)やTBS・フジテレビなどの番組制作に使われるスタジオがいくつも入った東京メディアシティ(東宝系)がある。つまり、かつて「東宝のまち」でもあった祖師谷・砧が、今「ウルトラマンのまち」に変身したというわけだ。

映画やTVが作り出す「偶像」の下地がこのまちには元々あった、と見るべきだろう。

2007年7月1日(日)10時47分 小田急線祖師ヶ谷大蔵駅前(世田谷区祖師谷1丁目)にて撮影

きな社会的世界」を想像させ読み込ませる。そして、フィールドワークと文章化の作業（凝視と対話）を通して、構想した物語の中身が検証され、修正され、再構成され、視覚化されて、画像とテクストからなる作品を成立させていく（資料 2）。このことによって、それまで見えていなかった“あらたな構造”や“写真の背後に隠されている世界”がくっきりと像を結び（結晶化して）見えてくる。「見る／見える」対象の幅と深さが増し、社会学的に語るに足る面白さ（物語素）を「見つめ／見極め」て主題化し、フィールドワークによって得られたデータや情報を整理・加工・分析・読み込み解釈してテクストを練り上げ、それを画像に添えて作品化する（＝物語る）。写真を見、写真でまちや人々を社会学的に見る営み（＝「見る／見える／見つめる／見極める」集合的な視覚経験）が、対話を介しての言語化の作業を随伴しながら意味世界が探求され、集合的な解釈枠組みや解釈を織りなして、写真をもとにした物語（集合表象）が構築されるのである。

集合的写真観察法は、「地域資源の発掘と情報共有システムの構築」に応用することで、「ソフトなまちづくり」「連携・協働の仕組み／仕掛けづくり」の一助となる道を拓いていく。以下にその試みを詳述しよう。

8．地域資源の発掘と情報共有システムの構築をめざして

まち歩きとそれをもとにしたワークショップは、地域の課題や問題点を発見して解決策を検討するためによく採られる手法である。参加者の間で地域の現状を客観的に把握・認識して良い点や問題点・課題を見いだして共有するのに極めて有効な手段であり、街づくり計画の本格的な検討に入る前段階で実施されることが多い。

下高井戸駅周辺地区街づくり協議会では、2006 年 10 月に協議会が発足して 1 年後の 2007 年 10 月に行っているが、桜上水駅周辺地区街づくり協議会でも、2008 年 6 月に協議会が発足して半年強経った 2009 年 2 月 1 日(日)に第 1 回目の「まち歩き」を実施している。

協議会が 2009 年 3 月に発行した「桜上水 街づくりニュースレター　私たちのまち・町・街」No. 4 によれば、2 月 1 日には 20 数名が参加して、地元の中学校でのグループ分けと事前の打ち合わせに 30 分、4 グループに分かれてのまち歩きに 90 分、中学校に戻っての反省会に 30 分と、都合 2 時間半ほどが費やされた。さらに、2 月 3 日(水)に再度中学校に集まって、1 時間をかけてグループ別の「点検マップ」を作成し、30 分かけて発表と意見交換も行っている。まち歩きとワークショップを主導したのはコンサルタントの大戸徹氏(大戸まちづくり研究所）であるが、大戸氏によって点検マップの「総合版」が制作され、同年 3 月 5 日の運営委員会で配布・報告されている。このマップは大変良くできており、桜上水駅周辺地区（世田谷区桜上水 4 丁目・同 5 丁目及び杉並区下高井戸 1 丁目の一部）の良い点・問題点・課題を具体的に指摘すると共に、それらを全て地図に落とし、現状を視覚的に把握し認識を共有する上で極めて大きな力を発揮するものである。

上記した 2009 年 11 月 8 日に実施した第 2 回目のそれは、新規に参加した日大文理学部

の学生・教員にとっては桜上水地区を内側から「のぞき込む」貴重な機会となったが、協議会メンバーにとっては第1回目のまち歩きを追体験し再確認・再認識するに留まったのかも知れない。しかし、地域住民と大学と行政の三者が、「共通の土俵」の上で交流し協議・検討をスタートさせたという意味で、やや大げさに言えばエポックをなす日となった。

後藤ゼミでは、このまち歩きに対して、「地区街づくり計画の策定」という到達点に至る道筋を前提とした場合の大きな有効性を見いだす一方で、「わがまちの新／再発見と意味／価値づけ」や「わがまち意識の醸成」を図るには、一工夫する余地が残されていると受け止めた。特に地域に関する情報をストックして、協議会のコアメンバーだけでなく誰でもアクセスでき、地域内で／地域を越えて幅広く共有される仕組み／仕掛けを用意することが求められるのではないか、と考えた。

こうして、ゼミプロジェクトで磨いた「集合的写真観察法」を応用することが発想され、以下のような基本方針が立てられた。

1. まちを歩きながら写真を沢山撮影し、桜上水を写真“を／で”見る、写真“で”読む／語る一連の営みにつなげていくこと。

2. GPS（全地球測位システム）ユニットを用いて画像データに空間メタデータ（緯度と経度）を埋め込み、地図や航空写真に落とし込むこと。

3. 成果を形にしてインターネット上で公開すると共に、各種データや情報の追加・書き込みが自由自在にできるシステムにして、画像と地図・航空写真と文字情報（統計データを含む）との有機的なリンケージを果たすこと。

4. これらによって、地域の諸資源（ヒト・コト・モノ、歴史・文化、情報、記憶、想い等）の発掘・発見と視覚化（ビジュアライズ）及びその共有化と有効活用を図るシステム（方法論）の構築を図ること。

5. こうした仕組み／仕掛けづくりを地域住民・大学・行政三者の連携・協働によって進め、これを起爆剤として「新たなまちづくりのムーブメント」をゆるやかに巻き起こしていくこと。

プログラムが企画・立案され、次ページに掲載したチラシを作成して関係者に配布したのは、2009年11月の下旬であった。

これには、まだ十分に発見・認識・共有されていない景観・風景・建物・音・人・佇まい・環境・出来事・歴史・記憶・情報等々の地域に眠っている“宝もの”（＝「地域資源」）を発掘して、新たな「意味」や「価値」を見いだし、それらをつなぎ合わせることで「魅力」を創出し、地域で共有すること、すなわち、「まちや住民が育む地域資源の新／再発見と共有化」を、「街づくり事業」に先駆けて行われる「まちづくり活動」の礎にしてはどうか、という提案が込められている。

第1回ワークショップは、以上のような経緯と考えにもとづいて2009年12月13日(日)に実施された[5)]。

資料３　ワークショップの案内チラシ

“桜上水 新/再発見！”プロジェクト

―地域資源（ひと・こと・もの）の発掘と情報共有システムの構築をめざして―

地域に長年住んでいる人でも、日頃見ている／知っている／分かっている様で、見落としていたり、価値に気づいていなかったりすることが、案外あるものです。そこで、十分に発見・認識・共有されていない“景観”“風景”“建物”“音”“人”“佇まい”“環境”“出来事”“歴史”“記憶”“情報”等々の地域に眠っている“宝もの（資源）”を、日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミが16年間に渡る“写真で語る：「東京」の社会学”プロジェクトの中で開発し実践している「集合的写真観察法」というフィールドワークの手法を応用して掘り起こし、桜上水駅周辺地区街づくり協議会の皆さんと一緒に新たな意味や価値を見いだし共有することを目ざして、今回のプロジェクトを企画しました。テーマは、まちや住民が育む地域資源の新/再発見と共有化、です。

２００９年１２月１３日（日）の天気予想
晴れ。暖かな"まち歩き"日和となるでしょう。

あなたも、桜上水４丁目・桜上水５丁目・下高井戸１丁目のまだ十分に知られていない素晴らしさを新/再発見し、それらをつなぎ合わせ、新たな魅力（価値）を創出することを通して、桜上水駅周辺地区をちょっと違った視点でプロデュースしてみませんか！

<< 第１回ワークショップ >>

１２月１３日（日）　午前１０時半～午後３時半（午後０時半～２時は昼休み）
１０時半までに、文理学部３号館２階の３２０４教室にお集まり下さい。

１０時半～１１時半	方法の説明とグループ分け（地区別に３グループ）
１１時半～１２時半	グループ毎にまち歩きと写真撮影
１２時半～１４時	昼休み（後藤ゼミでは画像データの整理・処理を行います）
１４時～１５時２０分	発表（スライド上映）と討議
１５時２０分～３０分	まとめ

<使うもの>

デジタルカメラ（１人１台）――各自でご用意下さい。
GPS ユニット（１グループに１台）――後藤ゼミが用意します。
ハイエンドノート PC３台とソフト類（画像処理用）――後藤ゼミが用意します。
プロジェクターとスクリーン（上映用）――教室に備え付けのもの。

参加人数が思いの外多かったので4チーム編成とし（1チーム6,7名）、地域のことを熟知している住民（水先案内）と全く知らないと言って良い学生（部外者の眼で撮影）が組んで一緒にまちを歩いた。どこを撮影するか、どんなアングルで撮るか、そこにどんなヒト・コト・モノが関わっているのかなどについて、その場で話し合った上で写真を多数撮影した。歩いたルートやどこで撮った写真かに関しては、GPSユニット（SONY GPS-CS3K）で記録した。教室では、その空間データを写真（画像データ）に書き込んだ上で、パソコンに取り込んだ。歩いたルートと撮った写真は、GPSユニットに付属するソフトで地図と航空写真上に表示した。それらをスクリーンに投影して、写真をめぐる意見・情報交換を重ね、パソコンで打ち込みテキストデータを残した。

資料4　桜上水駅周辺地区で撮影した写真を落とし込んだGoogle Earthの画像

(注)カラーをグレースケールに変換してあるため判別しにくいが、ネットに接続した上で、合計で約240箇所に付けられている丸いピンをクリックすると写真が表示されるようになっている。また、日大文理学部（右下のGoogleマークの左側）や桜上水駅、首都高、桜上水団地等には目印をつけてある。

ワークショップは熱のこもったものとなり、予定時間を30分ほど超過して終了した。成果は上々であり、確かな手応えもあったが、道半ばである。近々、Google EarthやGoogleマップ、Picasa（画像ビューアソフト）等を活用してオンライン上にアップすることで、情報を公開して誰でもアクセス可能とし、その写真に関わる様々なデータや情報や想いな

どを自由に書き込めるようにする予定である。

こうすることで初めて、厚みのある地域資源のデータベースが作り続けられ、共有度が高まっていくのであり、それに応じて新たなまちの魅力や価値の創出がなされていくと考えている。

地域住民と大学と行政の連携・協働によって紡ぎ出される「物語」は、まだプロローグに留まっている。私たちの思い描く地域資源の新／再発見と共有化と有効活用のプロセス、そのための仕組み／仕掛けづくりは、共に第一歩を踏み出したばかりであり、真価が問われるのはこれからである。

おわりに

冒頭で、「参画と協働のまちづくり」が掛け声倒れになりがちな実態の一端を示し、多様な主体が関与できる何らかの仕組み／仕掛けづくりがその実効性を担保する道となることを主張した。

本稿では、そのための試みについて述べてきたが、上述の通り、緒に就いたばかりであり、単に方向性／可能性を示したに過ぎない。しかしながら、次のような文脈を踏まえて捉え返す時、このささやかな試みが大きな意味を持つことになる。

近年、社会福祉（家庭訪問）や教育（出前授業）や芸術（出張コンサート）等の様々な分野で「アウトリーチ活動」が注目され、活発になっている。アウトリーチ（リーチアウト）活動とは、関心や関わりが薄い層に「手を差し伸べて」距離を縮め、潜在的なニーズを掘り起こす活動である。まちづくり分野においても、「住民主体のまちづくり」や「幅広い合意形成」を実現する上で、協議会やワークショップや説明会などに参加できない／しない（参加する意欲はあるが事情で参加できない／意欲がなくて参加しない）人々の声を少しでも反映させるために、例えばネット上に電子会議室／フォーラム／掲示板を開設するとか、自治体職員が住民のもとに出向いて意見交換するなどといったアウトリーチが行われるようになっている。

地域において「参画と協働のまちづくり」を単なるスローガンに終わらせないためには、非活動層と無関心層の声をすくい上げて反映させる仕組み／仕掛け（制度）を構築できるかどうかが極めて重要なポイントとなる。

現在進行中の本事例の特徴点は、1）写真を地図・航空写真・テキストとつなぎ合わせて情報を立体的に提示することで、「社会的世界へのアクセス・ポイントであり、そのアーカイブ」（Knowles, C. & Sweetman, P. 2004: 7）ともなるビジュアルベースの情報共有システムが構築されること。2)インターネット上に公開されるので、誰でもアクセス可能であり、また書き込みもできるオープンなシステムとなること。3)グループワークを通して、肉眼では捉えきれない都市の意識や無意識が写り込む写真を凝視・観察して「小さな物語素」を引き出し、社会学的想像力を働かせて写真の背後に隠れている「より大きな

社会的世界」を読み込み、フィールドワークを行いデータを収集・整理・加工・分析して、それまで見えていなかった「社会のプロセスや構造」を可視化・可知化すること（集合表象の結晶化）によって、社会的世界に関する新たな知見を提示する方法である「集合的写真観察法」がベースに置かれることで、誰でもプロジェクトに参画できること。これらを総合して言えば、完成型ではなく、「手を加える／差し伸べる余地」がいつでもまた誰に対しても用意される仕組み／仕掛けであるがゆえに、この未完のプロジェクトは、協議会やワークショップが縁遠い大多数の地域住民でもアクセス可能な「プラットホーム」を提供できる可能性を持っている。

連携・協働の「社会実験」を続けよう。

［注］

1)　協議会が街づくり計画の対象としているのは、「下高井戸駅周辺地区」が世田谷区松原 3 丁目・同 4 丁目の一部・赤堤 4 丁目の一部・同 5 丁目の一部及び杉並区下高井戸 1 丁目 1～16 番地、「桜上水駅周辺地区」が世田谷区桜上水 4 丁目・同 5 丁目及び杉並区下高井戸 1 丁目 17～32 番地となっており、日本大学文理学部が立地する世田谷区桜上水 3 丁目はエリア外（両地区の隣接域）である。

2)　第 5 節と第 6 節の記述は、後藤（2009a, 2009b）に依拠している。

3)　一例として、日本社会学会の機関誌『社会学評論』第 60 巻第 1 号（2009 年 6 月発行）の特集「『見る』ことと『聞く』ことと『調べる』こと―社会学理論と方法の視聴覚的編成―」をあげておく。特集の趣旨に関しては、後藤・好井（2009）を参照されたい。

4)　「東京人」観察学会（日本大学文理学部社会学科・後藤ゼミ）のウェブサイト URL http://www.chs.nihon-u.ac.jp/soc_dpt/ngotoh/tokyo/

5)　世田谷区交通政策担当部（2010）に紹介記事が掲載されている。

［文献リスト］

Barthes, R., 1961, "Le message photographique."（＝1984, ロラン・バルト著「写真のメッセージ」沢崎浩平訳『第三の意味―映像と演劇と音楽と―』みすず書房）

Baudrillard, J., 1997, *L' Art de la Disparition.*（ジャン・ボードリヤール著, 梅宮典子訳『消滅の技法』PARCO 出版）

Becker, H., 2004, "Afterword: Photography as Evidence, Photographs as Exposition," in Knowles & Sweetman eds.(2004)

Benjamin, W., 1935-36, "Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technisvhen Reproduziierbarkeit."（＝1995, ヴァルター・ベンヤミン著, 久保哲司訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション 1　近代の意味』ちくま学芸文庫）

後藤範章, 1996,「マルチメソッドとダイレクト・オブザベーション―リアリティへの感応力―」

（『日本都市社会学会年報』第 14 号，日本都市社会学会）
後藤範章，2000，「集合的写真観察法―都市社会調査の新地平―」（『社会学論叢』第 137 号，日本大学社会学会）
後藤範章，2005a，「都市を観る，都市を読む―写真で語る：『東京』の社会学―」（倉石忠彦ほか編『現代都市伝承論』岩田書院）
後藤範章，2005b，「『集合的写真観察法』に基づく教育実践」（『社会情報』Vol. 15 No. 1，札幌学院大学社会情報学部）
後藤範章，2009a，「ビジュアル・メソッドと社会学的想像力―『見る』ことと『調べる』ことと『物語る』こと―」（日本社会学会『社会学評論』第 60 巻第 1 号、有斐閣）
後藤範章，2009b，「ビジュアル調査法の展開と可能性：集合的写真観察法」（『新情報』Vol. 97，社団法人 新情報センター）
後藤範章，2010，「ビジュアルな記録を利用する」（谷富夫・山本努編『よくわかる質的社会調査―調査プロセス編―』ミネルヴァ書房、近刊の予定）
後藤範章・好井裕明「特集によせて」（日本社会学会『社会学評論』第 60 巻第 1 号、有斐閣、2009）
Knowles, C. & Sweetman, P., eds., 2004, *Picturing the Social Landscape: Visual Methods and the Sociological Imagination,* London: Routledge
西村清和，1997，『視線の物語・写真の哲学』講談社選書メチエ
大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編著，2005，『社会調査へのアプローチ―論理と方法―[第 2 版]』ミネルヴァ書房
Payne, G. & Payne, J., 2004, *Key Concepts in Social Research.*（＝2008，ジェフ・ペイン、ジュディ・ペイン著，高坂健次ほか訳『キーコンセプトソーシャルリサーチ』新曜社）
世田谷区，2006，『京王電鉄京王線（笹塚駅～仙川駅間）における沿線街づくりについて』（2006 年 2 月）
世田谷区，2009，『京王線沿線街づくり基本方針　人・地域・絆―沿線の一体性と個性が共存し、誰もが愛着を感じる街―』（2009 年 5 月）
世田谷区交通政策担当部鉄道立体・街づくり調整担当課，2009，『京王線沿線まちづくり通信』駅前広場基本構想特集号（2009 年 11 月）
世田谷区交通政策担当部鉄道立体・街づくり調整担当課，2010，『京王線沿線まちづくり通信』第 5 号（2010 年 2 月）
杉並区都市整備部，2009，『京王線沿線まちづくりの基本的な考え方』（パンフレット、2009 年 10 月）
東京都・世田谷区・杉並区・京王電鉄株式会，2009，『都市高速鉄道 10 号線　京王電鉄京王線（笹塚駅～つつじヶ丘駅間）の連続立体交差化・複々線化および関連測道計画等について』（パンフレット、2009 年 11 月）